2020.7.30 Vol.56
ISSN 0918-1385
郡山市立美術館ニュース
ザ・ルーフ

THE ROOF

白瀧幾之助
《編物をする少女》
1895（明治 28）年
油彩・キャンバス
当館蔵

Contents

- 企画展「うるわしき美人画の世界　木原文庫より」—美しい日本の四季を楽しむ　懐かしい風景—
- 企画展「郡山の美術『今昔秘話展』～雪村を中心に～」—時代を超えて受け継がれる名品たち—
- 「石田智子展」 作品制作の足取り
- Report
- Information

美しい日本の四季を楽しむ　懐かしい風景

今春、ステイホームで花見に出かけられず、満開の桜を画像で楽しんだ方も多かったかもしれません。新緑や夏山の清々しさ、海辺の風など、季節を愛で楽しむ私たち日本人の暮らしは変わらないようでいて、いまでは失われつつある風俗もあります。

「うるわしき美人画の世界―木原文庫より―」展会場で、浴衣に団扇、蛍の灯す光や虫の声などで夏の暑さを凌ぎ秋の夜長を楽しむといった、そんな少し前まであった懐かしい光景を思い出す方もいるのではないでしょうか。出品作の多くは、掛軸に描かれています。掛軸そのものも、現代の暮らしの中では見ることが少なくなったといえるでしょう。床の間に季節ごとに架け替え、楽しまれました。

会場では、近代日本画のコレクションとして知られる木原文庫選りすぐりの美人画を中心に、横山大観や菱田春草など近代日本画を代表する作家、また円山応挙や渡辺崋山といった近世の画家たちの作品が展示され、美人画ばかりでなく、近代の日本画の流れが追える充実した内容となっています。

美人画では特に、鏑木清方と島成園の作品が多く収集されていることで注目を集めている木原文庫。明治生まれの清方は、挿絵なども多く描き、江戸の粋な風情を残した明治の風俗を懐かしみながら愛情をもって描きました。成園は大阪の花街の女性たちをあたたかなまなざしで描いた女流画家で、近年ますます評価が高まっています。

コレクター・木原眞人氏は1942年白河市生まれ。岩手医科大学で学び、当市の名誉市民である今泉亀撤（1907～2009）の最後の教え子のひとりでした。今泉が眼科医として大きな業績を持ちながら、コレクターでもあったことは「〈眼の人〉今泉亀撤のコレクション」展（2018年）で紹介しましたが、こうした縁のある木原氏の審美眼は、より鋭く対象を観察しているようです。「日本画の線描の精妙さ、美しさに惹かれた」と語る木原氏の眼に選ばれた充実したコレクションは、その美しさで私たちを魅了し、描かれた懐かしい光景や風俗によって心安らぐ一時をもたらしてくれることでしょう。

（中山恵理）

上：北野恒富《阿波踊之図》（部分）
制作年不詳　絹本着色

下：円山応挙《藤花狗子図》
江戸時代　絹本着色（特別出品）

島 成園
《影絵之図》
1919（大正8）年
絹本着色

企画展

うるわしき美人画の世界　木原文庫より

2020/6/27（土）～8/23（日）

開館時間：午前9時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休 館 日：毎週月曜日（8月10日は開館、8月11日は休館）
観 覧 料：一般／800（640）円
高校・大学生、65歳以上／500（400）円
※（　）内は20名以上の団体料金
中学生以下、障がい者手帳をお持ちの方は無料
主　　催：郡山市立美術館
企画協力：青幻舎プロモーション

時代を超えて受け継がれる名品たち

室町時代後半を代表する画僧のひとり雪村周継（1500頃～1580年代前半）は、晩年を三春で過ごしたとされています。この地では様々なところで雪村の作品や資料が守り伝えられてきました。雪村が暮らしたとされる地に残されている「雪村庵」（現、郡山市西田町）は、そばに咲く桜とともに地域の名所となっています。雪村の作品のひとつ、当館が所蔵する《四季山水図屏風》は、晩年の会津滞在期に描かれたと推測されています。本展ではこの作品に加え、三春、郡山に伝わる雪村の作品を展示します。彼の独創的な作風をお楽しみください。

雪村周継《四季山水図屏風》 16世紀後半（室町末－桃山）
紙本墨画／六曲一双屏風　当館蔵

今回ご紹介するもう一人の画家、渡邊晨畝（1867～1938）は、現在の郡山市多田野に生まれ、大正から昭和初期にかけて国際的に活躍した日本画家です。帝室技芸員だった荒木寛畝（1831～1915）に入門した彼は、花鳥画を中心に優れた作品を残しています。日本と中国の連合美術展の開催において中心的な役割を果たすなど、両国の美術交流にも大きく貢献しました。本展では、これまであまり知られていなかった彼の業績と作品をご紹介するとともに、郡山ゆかりの作家に焦点を当て、彼らが風景をモチーフに描いた作品を中心に展示します。

美術館では、作品を収集すると同時に所蔵作品の継続的な調査や修復を行っています。《四季山水図屏風》においても、技法や材質について、当館収蔵後の調査の中で明らかになった点があります。このような発見は、作家や作品、そして時代背景を知るための重要な手掛かりになることもあります。収蔵した作品を調査研究することは、皆様に作家や作品の魅力をお伝えすることに役立てられるだけでなく、作品を美しいまま後世に引き継いでいくために必要な情報にもつながっていくのです。本展では、普段の展示では目にすることのできない、所蔵品の秘密を新たな切り口でご紹介します。

郡山とその周辺の地で生まれ、育まれ、受け継がれてきた作品の数々をご覧ください。

（新田量子）

上：雪村周継《達磨》
制作年不詳
紙本墨画淡彩
福聚寺蔵

下：渡邊晨畝《孔雀圖》
制作年不詳
絹本着色
安積疏水土地改良区蔵

上：小林万吾《朽葉の袖》
1907（明治40）年
油彩・キャンバス　当館蔵

下：岸田劉生《銀座と数寄屋橋畔》
1911（明治44）年頃
油彩・板　当館蔵

企画展

郡山の美術「今昔秘話展」～雪村を中心に～

2020/8/29（土）～9/27（日）

開館時間：午前9時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休 館 日：毎週月曜日（9月21日は開館、9月23日は休館）
観 覧 料：一般／300（240）円
高校・大学生、65歳以上／200（160）円
※（　）内は20名以上の団体料金
中学生以下、障がい者手帳をお持ちの方は無料
主　　催：郡山市立美術館

関連イベント

関連イベントにつきましては、8ページをご覧ください。

《むすんでひらいて》（第１室）

「石田智子展」作品制作の足取り

石田智子（作家）

２０２０年３月１日から４月19日まで開催された企画展「石田智子展」。本展の構想から作品制作について、石田氏に伺った。

２０１８年の夏、展覧会の大枠の打合せがスタートした。そして２０１９年、具体的な打合せを進める中で、企画展と企画展の間の時期に作品のない展示室を見せていただき、展示の構想を固めていった。

展示室は改修直後の真新しい状態で、作品がある状態で見ても感じとれなかった壁の白さ、美しさ、強さが強烈に迫ってきた。最初に思い描いたイメージではとても太刀打ちできないと感じたのである。私の頭の中はそこから混沌として藻掻きだした。つまり、その空間と戦い始めたのだ。

その白く大きく美しい壁に囲まれた空間とコラボするなら、作品も強く乱舞していなければバランスが取れない。乱舞させるには私自身が同じようにエキサイティングな状態になって作業しなければ作れない。しかし、今回作りたい空間はそんな空間ではない。今の自分に反していて苦しい…。１室目がそんな状態だから、２室目の作品も何枚スケッチしても自分の中でピタっとくるものが全く描けなかった。

そうこうしている間にどんどん日程が迫ってくる。いよいよ空の展示室を見られる最後のチャンスが来てしまった。重い気持ちのまま展示室に入ると、あの白く大きく強くて美しい壁がないではないか。瞬時に「助かった！救われた～」と心の中で万歳した。着物の展示が終わった直後のため可動式壁が未だ設置されておらず、ガラスの陳列ケースに囲まれた状態だったのである。その巨大なガラスは、壁から壁へのつなぎ目も、また天井から床までの仕切りもほとんど目立たなかった。しかも背後には、何もない奥行き半間ほどの空間が静寂を湛えていた。これで穏やかな空間が作れる。気をつけることは、作品そのものに当っている光の量と作品や床までの空間の明るさ、或いは作品からはみ出している光の量を注視すること、そしてガラスに人や作品が映り込みすぎてうるさくならないか、といったことだった。しかしそれらはセッティングの現場でしか判断できず、この段階で緻密に考えても結論が出ることではない。そう思って安心したら、ある夜、小さなメモ用紙にとても優しい波の線が描けた。すごく単純だけれど、何だかすっとしてほっとした。「これでいこう」と２室目はあっけなく自然に決まった。

いつものことながら、現場ではいろいろな問題に遭遇する。草稿段階では気づかなかったことに気づいたりもして、考えながら制作することが多いのだが、予想通り設営段階に入って試行錯誤することになったのが、ライティングだった。ライティングは、「何を言いたいのか」「何を見せたいのか」を決定づける最後の締めである。１室目の空間は明るくせず、作品だけを浮き上がらせたかった。新式のＬＥＤライトを用意してくださっていたにも拘わらず、私がハロゲンライトを使いたいと申し出たため、しまい込んであるハロゲンライトを大量に出してきてくださった。その時は、全てハロゲンでいくつもりだったのだが、１室目の制作中、不意にＬＥＤライトの面白さに気づいた。「そうだ、２室目はこのクールな強い光で曲線のエッジだけを照らそう！」何をどうすべきかが見えた瞬間だった。光に照らされていない紙撚を見せるのは今回が初めて。自分としてはすごい冒険だった。

そして残るは、何となく何かが欲しい１室目左奥の空間。他の作品を作りながらあの隙間が何をほしがっているのか、またもや模索が始まった。とにかく持ち込んだ資材の中でやるしかない、そう思って骨格になる金属をさわっていたある日、垂直にステンレス棒を立ててみた。「あ、これでいいんだ」。部材が教えてくれた。意味を訊かれてもそれらしい事は言えないが、この作品が１室目の空間に好ましいアクセントを与えてくれたと思う。

私の紙撚を使う作品は、すでに出来上がったものを展示するわけではないため、美術館に来てからもいろいろと問題を抱

《揺籃》（第２室）

え込んでしまう。展示のために一ヶ月という長い時間をいただき、迷い悩む時間もあって本当に思う存分仕事をさせていただいた。制作途中で、これは失敗だと落ち込むこともあったが、何かしら大きなエネルギーに導かれどんどん好転していったような気がする。

中止となってしまった佐治館長（当時）との対談のタイトルを「撚る手と自分と紙撚達」としたが、私は基本的に作業と自分と素材が対等な関係を保つことが大切だと考えている。大学では染織を専攻したが、絵を描き技法を極める事にはあまり興味を持てず、布に染液を染み込ませ、繊維の細胞一つ一つに色素が染み込んでいく様子が想像できるような作業が好きだった。やがて布に描かれた世界を極めるのではなく、布という素材そのものと対峙し、染めることもせず、布が見せる表情を追うような制作に変化していった。

紙は切って撚れば紙撚になるが、布は同じように切って撚っても撚られた形をとどめない。紙という素材そのものの特性が、紙撚という姿にはっきり表れているのだ。また今は金属も使っているが、その素材にもお伺いを立てつつ制作している。例えば、今回の骨組みであるステンレス棒は、全て真っ直ぐなものである。作品では丸みやたわみを見せているが、それらは全て、芯になるパーツに差し込む角度とステンレス棒や紙撚の自重による自然なたわみである。展覧会が終わって解体すればみな真っ直ぐな棒に戻るのだ。私は美しくあれかしと願い、切ったり撚ったり並べたりしているだけ。私が素材に話しかけるようにある行為を仕掛けると、返事をするかのように形ができる。それをそのまま展示室に置いているだけなのである。

今回の制作の根底には、「人間は基本的に皆が孤独、そして微塵のように小さな存在」という諦念のような思いがある。しかしそんな自分でも、無数の限りないご縁でつながったたった一つだけのいのち。とても有り難い、芽吹きのようなものだ。成形された紙撚の群れは、孤独なエネルギーが集結した結果の、目出度い出来事なのだと思う。そんな思いを宙に浮いている惑星になぞらえ、あのような漂う球体として表現したのが１室目。人は震災のような不慮の出来事に、どう対処していいかわからないものだが、わからないながらも、命を守るため何とかして今の状況から一歩を踏みだすに違いない。「不安や悩みを抱え自信もない。しかしそれでも未来に向かって揺らぎながらも立ち上がる。」そんな思いと展示室のシャープな四角い空間が一体になり、できたのが２室目の作品である。

そしてトータルな意味でのタイトルを「雑華」としたのは、紙撚一本一本が整っていない私自身だからである。どの自分が本当ということもなく、あるがままに存在する。優劣も順序もあらゆる分類もなく、総ての存在が認められる視点があって欲しい。その時一切は「雑華」になるのではないだろうか。むろんそれは、貴方に向けた私の切なる願いでもある。「雑」から「純」の選別することを止めれば、そこには「雑華」がいつも咲き誇っているはずである。

共同制作

＼ 展示しました ／

前号に掲載した、小中学校の皆さんによる共同制作は、「石田智子展」の会期中、美術館ロビーに展示されました。紙の隙間を光が透過して、ステンドグラスのような美しい作品になりました。

令和元年度

新たに作品が収蔵されました

令和元年度も、皆様のご協力によって、当館に新たな収蔵品を加えることができました。

購入作品としては、3ページでもご紹介した渡邊晨畝（1867～1938）の掛軸2点、福島県南会津出身の日本画家、湯田玉水（1879～1929）の掛軸3点、ベルギーに生まれイギリスで活躍した作家、フランク・ブランギン（1867～1956）の詩画集、建造物や公園などのパブリック・スペースに設置される大型作品を数多く制作する現代作家、西野康造（1951～）の金属線を用いた精緻かつ堅固な立体作品3点、計9点です。

また、ブランギンの油彩画1点を畑中俊彦様から、画集3点を（株）リーチアート様からご寄贈いただきました。そして、日本を代表するファイバー・アートの作家の一人、吉村正郎（1946～2017）の糸と布を用いた立体作品20点を、ご本人名義でご寄贈いただきました。

渡邊晨畝の作品は、8月29日から9月27日まで開催予定の企画展「郡山の美術『今昔秘話展』～雪村を中心に～」で展示予定です。そのほかの作品も、来年度以降、順次展示していきます。

左：渡邊晨畝《渓流に双鶴》
制作年不詳
絹本着色

右：フランク・ブランギン
《エリザベス女王の乗船を待つ
ゴールデン・ハインド号》
1903～1905年頃
油彩・キャンバス

常設展示

※7月21日（火）は展示替えのため
常設展示室はご覧になれません。

7月19日（日）まで

1　イギリスの風景画
2　日本人画家の肖像
3　日本の前衛アート
　1950-1960代を中心に
4　版画・いろいろ／やきもの鑑賞

7月22日（水）～10月18日（日）

1　イギリス美術の流れ
2　近代洋画の金字塔
3　戦後の美術潮流と郡山
4　明治以降の版画／
　ドレッサーの芸術　東西の美

「1分間で郡山市美」はじめました

当館の所蔵品を約1分間で紹介する動画、「1分間で郡山市美」を郡山市YouTubeチャンネルにて配信中です。楽しく、分かりやすい内容になっていますので、ぜひご覧ください！

※動画で紹介されている作品は、現在常設展示室に展示されていないものもあります。予めご了承ください。

動画はこちらから

表紙の作品

白瀧幾之助
《編物をする少女》

1895（明治28）年
油彩・キャンバス

89.5 × 54.2 cm
当館蔵

白瀧幾之助（1873-1960）は、兵庫県生まれの画家です。東京美術学校（現在の東京藝術大学）で学び、イギリスとフランスにも留学しました。この作品は、夕立の後でしょうか、縁側で傍らに傘を置き、足をぶらぶらさせて一心に編み物をしている少女が、愛らしく描かれています。光が白い着物に反射している様子が爽やかに表現されています。

Report

第 11 回 風土記の空―郡山市内の中学校美術部による作品展―

2019 年 11 月 19 日（火）～ 12 月 24 日（火）

場所：美術館ロビー　　主催：郡山市立美術館

郡山市内の中学校美術部の活動の中で制作された作品を展示しました。中学生が自分で作品を額装や展示をする体験も実施し、それぞれの感性あふれる個性豊かな作品が並びました。

参加校：日和田中学校、守山中学校、郡山第四中学校、郡山第五中学校、郡山第七中学校、緑ヶ丘中学校、小原田中学校

中学生による展示体験

「志村ふくみ展」関連

講演会「志村ふくみの作風の展開」

2019 年 11 月 2 日（土）※台風の影響により 10 月 13 日から変更

講師：佐治ゆかり
（当館前館長）
場所：多目的スタジオ

染織家、志村ふくみの初期から現在までの作風およびその展開について、出品作品を中心とした画像資料とともに紹介しました。

ワークショップ「虹を織る」

2019 年 10 月 19 日（土）、20 日（日）、27 日（日）

講師：佐治ゆかり
（当館前館長）
場所：創作スタジオ

織りの最も基本的な技法「平織り」で、毛糸のマフラーを制作しました。思い思いに糸を織り、自分だけのマフラーが完成しました。

「クリストファー・ドレッサーと正倉院宝物」展関連

講演会「クリストファー・ドレッサーの来日と正倉院訪問」

2019 年 11 月 24 日（日）

講師：佐藤秀彦（当館前副館長）
場所：多目的スタジオ

イギリスのデザイナー、クリストファー・ドレッサーの来日とその意義、そして正倉院宝物の調査について解説しました。

講演会「近代の正倉院宝物」

2019 年 12 月 15 日（日）

講師：西川明彦さん（宮内庁正倉院事務局所長）
場所：多目的スタジオ

正倉院の概要や宝物の特色、近代になってからの宝物の保存・修理について解説していただきました。

特別ギャラリートーク

2019 年 12 月 7 日（土）

講師：吉岡更紗さん（染織家）
場所：企画展示室

本展覧会に出品された染織品、正倉院裂や、伎楽衣装の復元について、染織家ならではの視点から解説していただきました。

※ 2020 年 4 月 29 日（水・祝）から 6 月 14 日（日）まで開催予定だった企画展「無言館展」は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となりました。

Information

企画展関連イベント

郡山の美術「今昔秘話展」～雪村を中心に～　※すべて定員 50 名　事前の申し込みが必要です。

講演会「雪村庵と福聚寺」
講師：玄侑宗久さん（福聚寺住職）
日時：9 月 22 日（火・祝）　午後 3 時から
場所：多目的スタジオ（聴講無料）
申込締切：9 月 6 日（日）必着

特別講座「油彩画の修復～所蔵作品を通して～」
講師：富山恵介さん（修復研究所 21）
　　当館学芸員
日時：9 月 19 日（土）　午後 3 時から
場所：多目的スタジオ（聴講無料）
申込締切：9 月 6 日（日）必着

美術講座「郡山ゆかりの作家たち」
講師：当館学芸員
日時：9 月 12 日（土）　午後 3 時から
場所：多目的スタジオ（聴講無料）
申込締切：8 月 30 日（日）必着

［参加申し込み方法］

①～④をご記入のうえ、ハガキ・ファックス・Ｅメールのいずれかでお申し込みください。
①参加希望イベント名
②参加希望者氏名（1 件につき 1 名様まで）
③郵便番号・住所
④電話番号（Fax 番号）

※ それぞれのイベント名を明記のうえ、ご応募ください。
締め切りはそれぞれのイベントをご参照ください。

応募先
ハガキ：〒 963-0666　郡山市安原町字大谷地 130-2
ファックス：024-956-2350　　Ｅメール：bijutsukan@city.koriyama.lg.jp

新型コロナウイルス感染症対策について

お客様へのご協力のお願い
- マスクを着用し、咳エチケットにご留意ください。
- 観覧の際は、他の方と 2m 以上の間隔の確保をお願いします。
- 手指の消毒、こまめな手洗いにご協力ください。
- 発熱、呼吸器症状（咳など）のある方は入館をご遠慮ください。
- 団体でご来館の際は事前予約をお願いします。

感染拡大防止の取り組み
- 館内にアルコール消毒液を設置しております。
- スタッフは、マスクを着用して対応させていただきます。
- 一定の対人距離を確保するため、受付に待機線を設置しています。
- 受付等には飛沫感染防止用の透明仕切りを設置しています。
- 来館者エリアの清掃を強化しています。
- 混雑する場合は入場制限をすることがあります。

TOPICS

juju
130CAFE
ジュジュ イチサンマル カフェ

営業時間／ 11:00-17:00
電　　話／ 024-942-2250

自家製ワッフルを
フルーツや生クリームなど
多様な材料で盛りつけたプレートパフェに
夏季限定メニューが登場！

WA!FFLE Blueberry & Yogurt ver.
ワッフル ブルーベリーとヨーグルト

単品 / 750 円　　ドリンクセット / 1,170 円

じっくりと焼き上げたプレーンワッフルにブルーベリーのコンポートと
チーズケーキ風味のブルーベリーマーブルアイスを添えて。
さっぱりと爽やかなヨーグルトソースがアクセントになった
夏期限定のワッフルはアイスが溶け出すくらいが食べごろ。
パフェを想像しながらお召し上がりください。

※ メニューや料金、営業時間は予告なく変更となる場合がございます。
予めご了承ください。

郡山市立美術館
Koriyama City Museum of Art
〒963-0666　福島県郡山市安原町字大谷地 130-2
TEL.024－956－2200　FAX.024－956－2350
https://www.city.koriyama.lg.jp/bijutsukan/
敷地内禁煙
発行日／令和２年７月 30 日

FSC www.fsc.org ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C011278
VEGETABLE OIL INK
紙へリサイクル可
この紙はFSC®認証紙です。